Contemporary Jazz Magazine

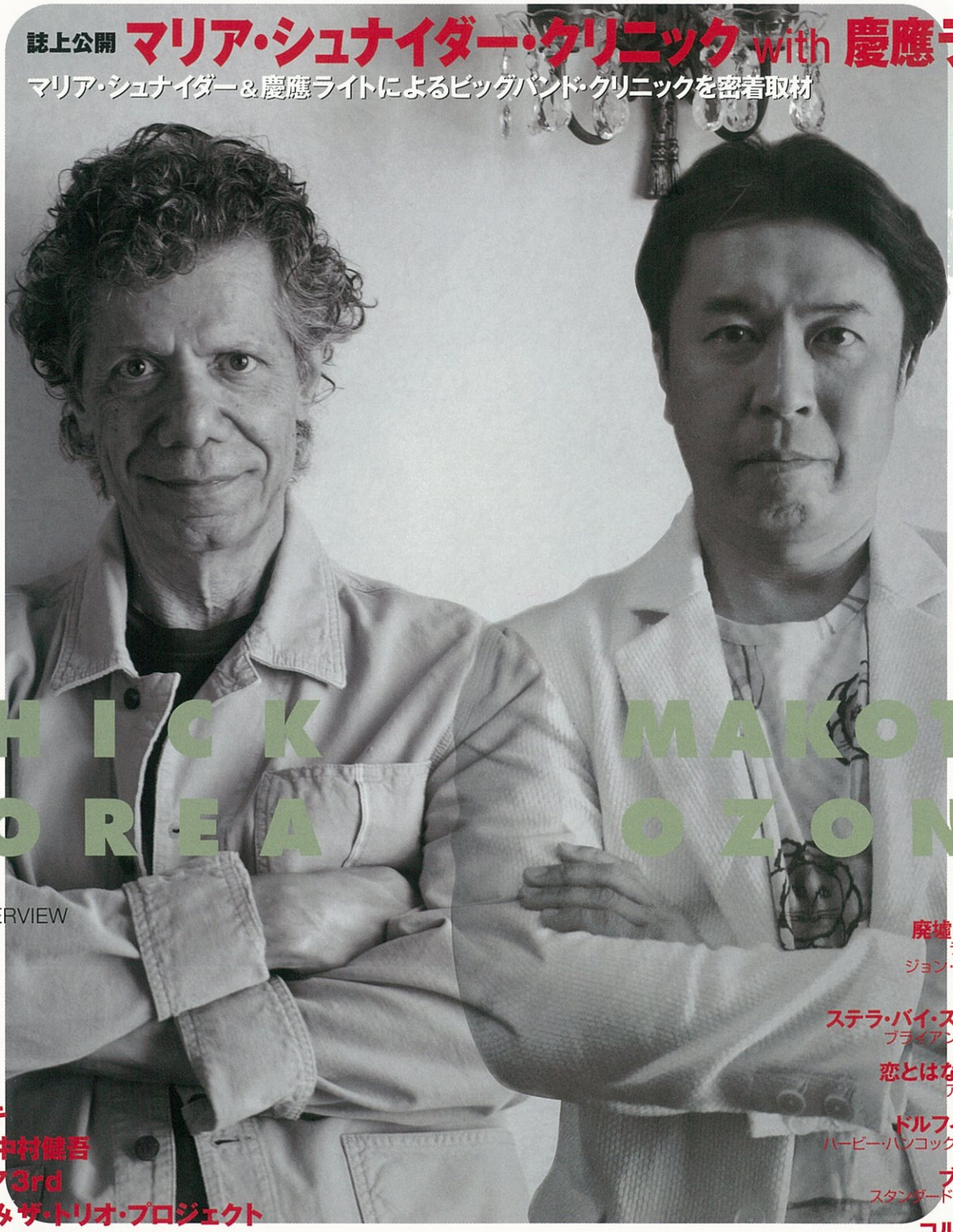
jazz Life

6
2016
JUNE

Cover Story **小曽根真** チック・コリアとのデュオ・ツアーが実現！
世界のOZONEが語る"Music, My Life"

ベース特集 **BASS squared～迸る低音**
ブライアン・ブロンバーグ/日本人若手ベース・プレイヤー/ジャズ・ブルース・パターン

誌上公開 **マリア・シュナイダー・クリニック with 慶應ライト**
マリア・シュナイダー＆慶應ライトによるビッグバンド・クリニックを密着取材



CHICK MAKOTO
COREA OZONE

LIVE & INTERVIEW
北村英治
渡辺貞夫
勝田一樹
纐纈歩美
沢村満
岸ミツアキ
今野敏＆中村健吾
カシオペア3rd
上原ひろみ ザ・トリオ・プロジェクト
ナチュラル・ボーン・キラー・バンド

Score
廃墟ジンバブエ
ラリー・コリエル
ジョン・スコフィールド
ジョー・ベック
ステラ・バイ・スターライト
ブライアン・ブロンバーグ
恋とはなんでしょう
アート・ペッパー
ドルフィン・ダンス
ハービー・ハンコック（ジャズ・ドリル）
ブルーゼット
スタンダード・ベース講座Ⅱ
コルコヴァード
ジャズ・ギター・ソングブック

EVENT REPORT Record Rediscover Project

東洋化成×ナガオカ×テクニクス レコード再発見プロジェクト

ヘッドクォーター、製造ラインを日本においた“Made in Japan”の3社が“音楽鑑賞推進イヴェント”をスタート！

4月12日、テクニクス・ブランド誕生50周年を記念したハイエンド・オーディオ向けのターンテーブル「SL-1200GAE」の予約開始日※に合わせ、同社と、レコード針の製造・開発を手がけるナガオカ、そして国内唯一のレコード・プレス工場を持つ東洋化成という、“Made in Japan”にこだわりを持つ3社により、レコードの魅力を広げようという「レコード再発見プロジェクト」が発足。東京タワー大展望台「club333」で開催されたその記念イヴェントのもようをリポートしよう。

イヴェント当日に登場した3社の製品。ターンテーブル＝テクニクス「SL-1200GAE」、レコード針＝ナガオカ「MP-500」、再生されたアナログ盤は東洋化成製

東洋化成×ナガオカ×テクニクス

まずあいさつに立ったのは、SL-1200GAEの開発を担当したパナソニック・伊部哲史氏。「本製品のコンセプトは、“ダイレクトドライブ・ターンテーブルの再定義”です。SL-1200シリーズは、1970年代に登場して累計350万台を販売し、テクニクスのひとつの顔というべき商品になっています。そのターンテーブルを再定義すべく、すべての部品を見直し、“コギング”と呼ばれる従来モデルが持っていた回転の揺らぎや微振動など、すべての問題を解消することで、レコードに刻み込まれた溝から音楽が生まれる感動的な瞬間、それをそのまま再現できるレコード・プレーヤーを製作できた自負しています」と語った。

続いて、今回のプロジェクトで採用された最高級レコード針「MP-500」の開発者であるナガオカ・寺村博氏は、「20kHzまでほぼフラットな特性で、とてもナチュラルな音を再現できるので、ジャンルを選ばず、レコードの中に刻まれた情報を余すところなく引き出してくれるカートリッジです」とコメント。

そして、カッティング・エンジニアである東洋化成・西谷俊介氏は、同社でカッティングからプレスまで、レコード製造の全工程が行なえることのアドヴァンテージを紹介したうえで、「針と溝の共鳴からなる衝撃的な感動を、より多くの方に伝えて、共有していただきたい」と、このプロジェクトへの期待を述べた。今後は、同プロジェクトによるさまざまなイヴェントが展開されていく予定だ。

伊部哲史氏（パナソニック・コンシューマー・マーケティング・ジャパン本部テクニクス担当）

寺村 博氏（ナガオカ技術アドヴァイザー）

西谷俊介氏（東洋化成レコード事業部カッティング・エンジニア）

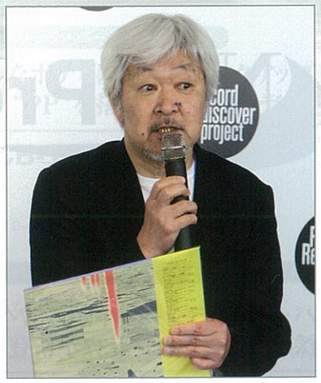
アリス＝紗良・オット

イヴェントは、続いてゲストによるトークと試聴コーナーへ。最初に登場したのは、テクニクス・ブランドのアンバサダーであるピアニスト、アリス＝紗良・オット氏。彼女は、演奏家という立場から、「ミュージシャンにとって、ライヴはとても大切なもので、お客様と共鳴し、感動を共有できることが重要です。そうした音をできるだけナチュラルに再現してほしいですし、テクニクスの素晴らしいオーディオを通して、できるだけ多くの方々、新しい世代の方々に音楽の美しさを知っていただきたい」と語った。

そして、SL-1200GAEのために制作されたレコード（非売品）に収録された、自身の演奏によるグリーグ「蝶々」を再生。「私は、ジャズ・バーに行って、レコードを聴きながらウィスキーをいただくのが大好きなんです。ノスタルジックな音が好きで、レコードは、とてもウィスキーに合う音だと思います。聴いていて音に酔う。その感覚がとても好きです」と語った。

アリス＝紗良・オット氏（p.テクニクス・アンバサダー）

鈴木慶一氏（音楽家）



和田博巳氏（オーディオ評論家）

鈴木慶一×和田博巳

続いて、音楽家の鈴木慶一氏とオーディオ評論家の和田博巳氏が登場。ふたりは、今年で結成45周年を迎えた“はちみつぱい”のメンバー同士であり、和田氏は、「SL-1200シリーズは、“はちみつぱい”と同じ1972年のデビュー。新しいモデルは、リニューアルと言うよりも、性能を10倍以上にアップさせての再登場で、この価格帯では世界最強のターンテーブルに仕上がっていると思います」とSL-1200GAEを絶賛。

そのターンテーブルで、鈴木氏が持参したグレイトフル・デッドのモービル・フィデリティ社製高音質45回転盤（2枚組）『アメリカン・ビューティー』から「ボックス・オブ・レイン」を再生。当時、「それまでとの劇的な音の変化に驚いた」（鈴木）というエピソードを交えながら、アコースティック・ギターの響きや艶やかさについて和田氏と語り合った後、和田氏自身がマスタリングとカッティングを監修し、2014年12月にアナログ盤で再発されたはちみつぱいの『センチメンタル通り』（1973年）のなかから「薬屋さん」を再生。

鈴木氏は、「73年の空気を閉じ込めていることを、ひしひしと感じます。テクノロジーと寄り添った、その時代のスタジオの空気というものがあって、それがきちんと聴けることが、とても嬉しい」と、そのサウンドの印象を振り返った。

ピーター・バラカン×藤本国彦

最後に登壇したのは、ブロードキャスターのピーター・バラカン氏と、音楽評論家である藤本国彦氏。バラカン氏は「CDとハイレゾ、それにレコードを聴き較べるようなイヴェントも時々あって、そういう場合、なぜか最終的に、アナログのレコードが一番いいという結論になるんです」と語り、この話に、藤本氏も大きく頷いていた。その一方で、「ブームになってしまうと、すたれやすいから」と、必要以上にレコード人気を煽ろうとは思わないと言うバラカン氏。「そういうことではなく、これまでレコードに触ったことがないという若い人に、“この音いいな”と感じるきっかけになってほしい。ていねいにレコードを扱うことで、聴き方までていねいになるといったことも、これまたいい体験。そう感じる人が、少しでも増えればいいなと思っています」とレコード、そして音楽に対する想いを述べた。

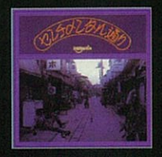
そしてこの日、ふたりが選んだ“1枚”は、バラカン氏がイギリスで発売日に購入したという、エリック・クラプトン(g)のプレイで有名なデレク・アンド・ザ・ドミノスの『いとしのレイラ』と、藤本氏が持参したビートルズの名盤『ザ・ビートルズ（ザ・ホワイト・アルバム）』。これらを試聴しながら、音圧のすごさや、ベースとバス・ドラムの素晴らしい密度感について解説を行ない、最後にバラカン氏が、「オーディオとワインは一緒だと思うんです。ふだん、家で飲むのはテーブル・ワインだけど、年に何回か、いいワインを飲ませてもらいたい（笑）。オーディオも、なかなか手が出せないようなハイエンド・システムであっても、いろいろな試聴イヴェントが開催されているので、そこに出かけて、たまにはいい音で楽しんでみてもらいたい」と、このイヴェントを締め括った。■

ピーター・バラカン氏（ブロードキャスター）

藤本国彦氏（音楽評論家）

当日試聴されたアナログ盤

『American Beauty』
Grateful Dead
（1970年）



『センチメンタル通り』
はちみつぱい
（1973年）

『Layla and Other Assorted Love Songs』
Derek and the Dominos
（1970年）

『The Beatles (White Album)』
The Beatles
（1968年）

※ここで掲載しているジャケット写真は当日試聴したアナログ盤のものと異なります

※「SL-1200GAE」は予約開始30分で完売した（日本での販売台数は限定300台）。